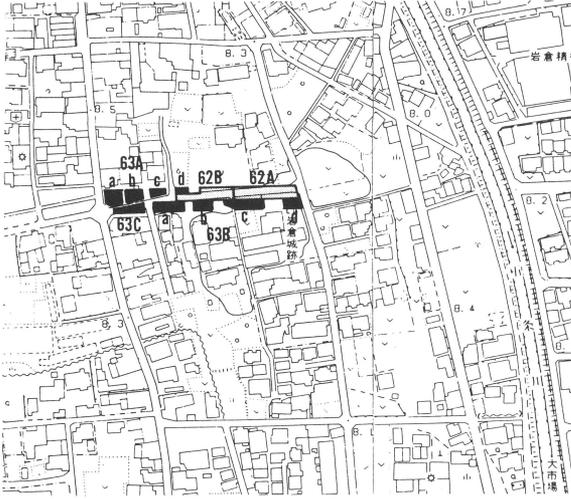


いわくらじょう
岩倉城遺跡



第1図 岩倉城遺跡調査区位置図

調査の経過 岩倉城遺跡は、戦国時代の岩倉城跡を中心とする遺跡で、岩倉市下本町字城址付近に所在する。岩倉城は、五条川中流域右岸の幅約250m、標高約10mの南北にのびる自然堤防上に立地する。発掘調査は、県道萩原・多気線が城跡中央を東西に横切するため、事前調査として実施した。昭和62年1月に開始、昨年度は760㎡、本年度は1470㎡の調査面積であったが、周辺は民家が建ち並び、

上水道・ガス管の維持、生活道路確保のため調査区は寸断されたものになった。本年度の調査では、A区で多量の円筒埴輪を出土した幅4m、深さ10～30cmの溝S D01の検出により一辺20m以上の方墳の存在を確認し、B区では岩倉城の内堀と考えられる幅6m、深さ2.5mの溝S D03を検出した。遺構を確認できなかった時期もあるが弥生時代から戦国時代の土器等が出土し、I期：弥生時代、II期：古墳時代、III期：奈良時代、IV期：平安時代、V期：鎌倉・室町時代、VI期：戦国時代という岩倉城遺跡の時期区分を想定した。

調査の概要

I期 Ad区において、弥生時代後期の竪穴住居を2棟検出した。



B C区 S D03遺物出土状態



C区 全景

II期 Ad区において、昨年度検出した方墳の周溝 S D01の続きを確認した。多数の円筒埴輪片と若干の須恵器片が出土したことから、6世紀初頭頃の高墳と考えられる。

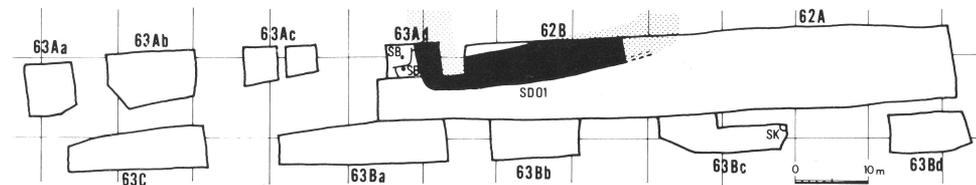
III期 Bc区において南北にのびる溝 S D02を1条検出した。

IV期 V期 明瞭な遺構は確認できなかった。

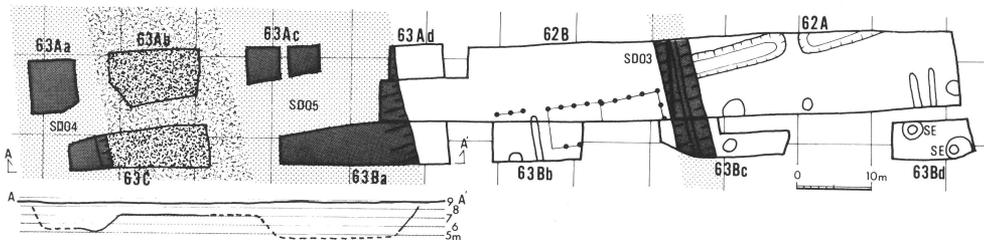
VI期 Bc区において、昨年度検出した内堀らしい溝 S D03の南延長部分を確認した。土師質皿、瀬戸・美濃系陶器を中心とする土器・陶磁器類のほか、箸・折敷・曲物などの木製品や呪符木簡・獅子頭など珍しい遺物が出土した。またAa区・Ab区・C区の所見から南北にのびる幅10m、深さ3mの溝 S D04、Ac区・Ad区・Ba区の所見から S D04に並行する幅23m、深さ4m以上の溝 S D05を検出した。S D04、S D05共に遺物量は少ないが、窖窯から大窯II期にかけての瀬戸・美濃系陶器が出土した。S D04から千体仏の一体らしい木彫地藏菩薩像が出土した。S D04と S D05に挟まれた部分は本丸上と比べると低く、現地表下1.2mから下は有機物(植物の根)の疎密により灰、黒色の砂質シルトが互層をなして自然堆積状況を示しており、岩倉城の時代にも依然として湿地であったことが推測され、したがって S D04と S D05とその両者に挟まれた部分は常に滞水し幅50mの外堀を形成していたと考えられる。

まとめ

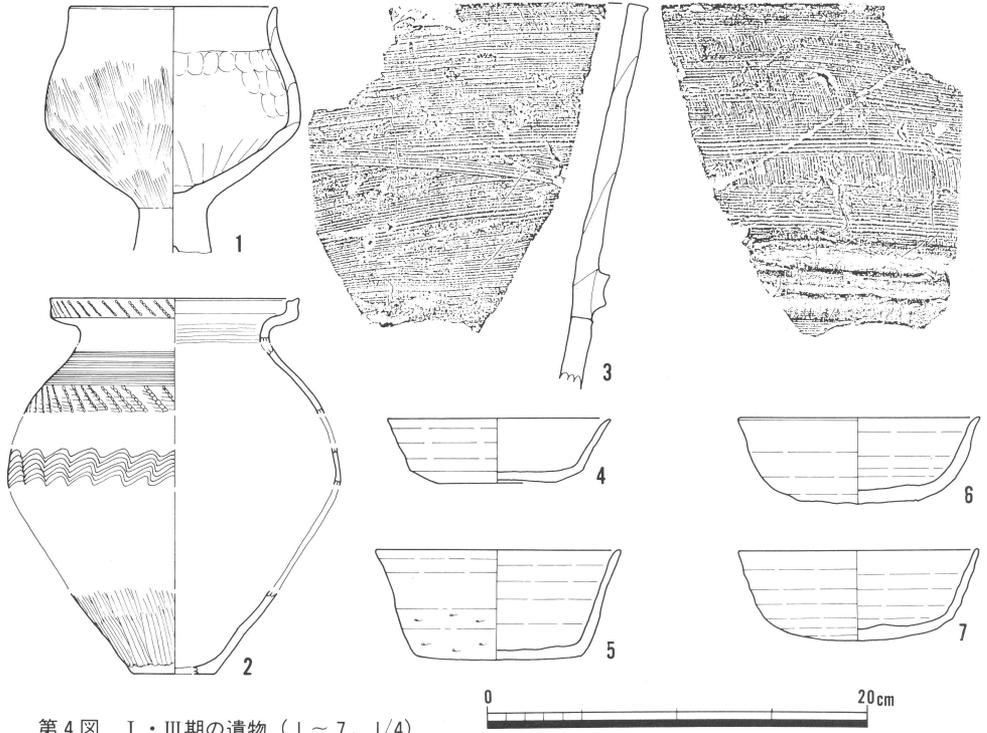
民家が調査区に接近していることと異常に多い雨のため外堀の S D05は溝底を確認できなかったが、外堀の構造・規模が推定できたことは今年度の最大の成果といえる。また昨年度につづいて S D03から出土した呪符木簡や獅子頭、S D04から出土した地藏菩薩像などは当時の人々の精神生活をうかがうことができる貴重な資料といえる。(松原隆治)



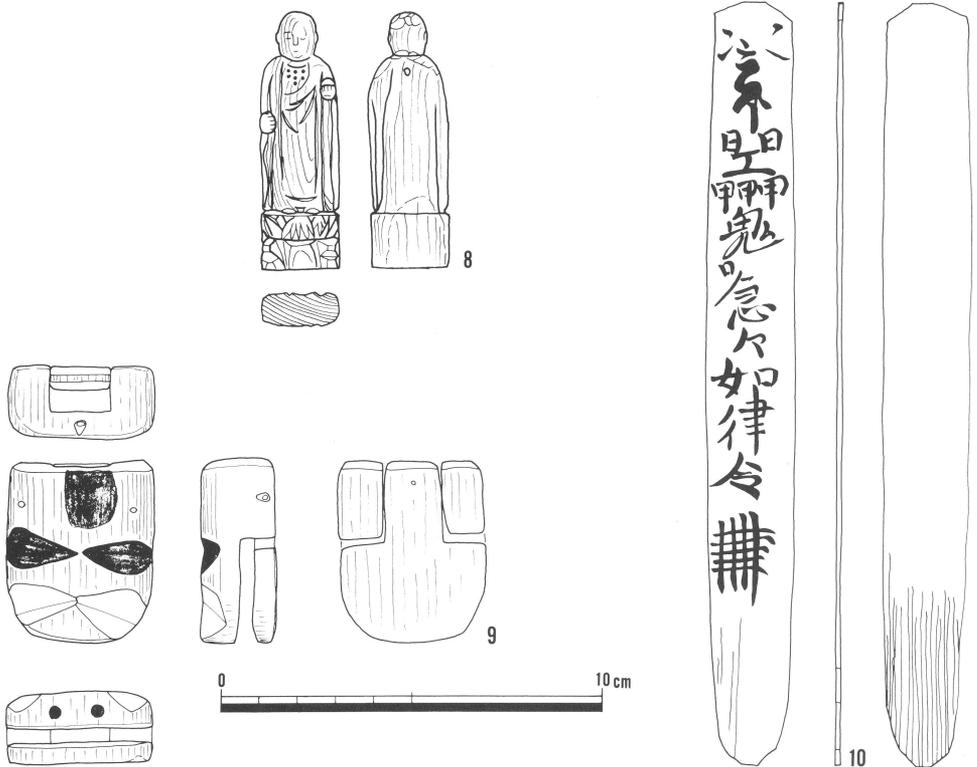
第2図 I・II期の遺構



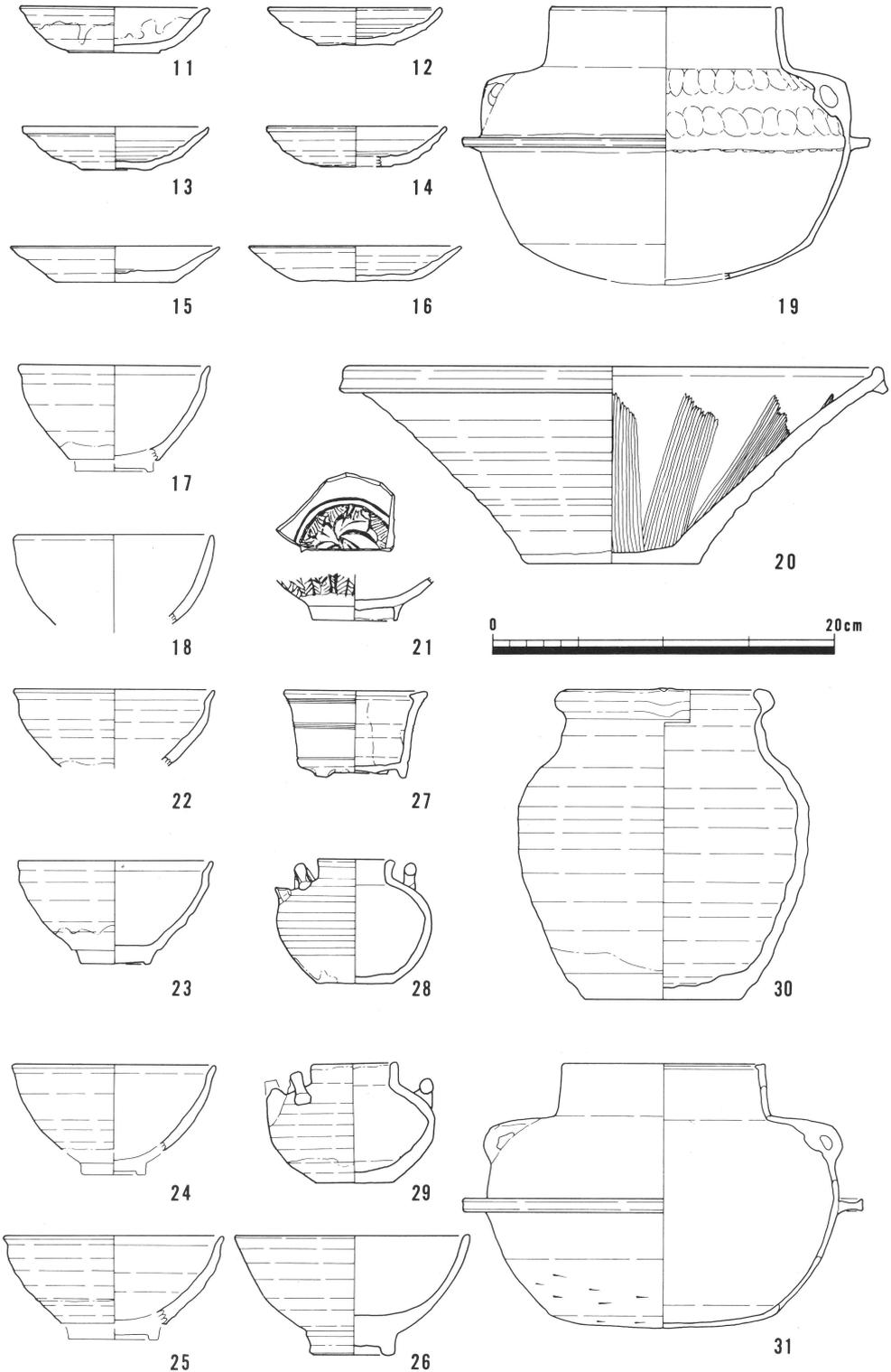
第3図 VI期の遺構



第4図 I・III期の遺物 (1~7、1/4)



第5図 VI期の遺物 (8~10、1/2)



第6図 VI期の遺物 (11~21: 外堀出土、22~31: 内堀出土、いずれも $\frac{1}{4}$)